別
6

幼馴染

日蔭に滴る雪を踏みつゝ、堅雨が龍神温泉の棧屋に着いたのは夜の九時過であつた。其晩は綿のやうに疲れて居たので、あいさつ丈けして、食事を濟してから直ぐ湯にも浴らずに寢てしまつた。

翌る朝は九時まぢ〳〵グツスリ寢込んで、偶つと眼を覺すと、枕邊の障子が白んで、世間がサヤに靜かなので、山と身體を伸し

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

511

て指(ゆび)尖(さき)で一寸障子を押開(おしあ)けた堅雨(けんじ)は、のや！大雪だ！と叫(さけ)ぶやうに言(い)つて振(ふ)返(かへ)つた。そして寝床(ねどこ)のまゝで冷(つめ)たい緑側(えんがは)に立(た)つて向山(むかひやま)を見た。

昨宵(ゆふべ)の墨絵(すみゑ)の景色(けしき)は鮮(あざ)やかに一変(いつぺん)して居(ゐ)た。昨(きの)ふ降止(ふりや)んで處々(ところどころ)雲切(くもきれ)れになつて陰(かげ)から覗(のぞ)くやうに顔(かほ)を出(だ)す太陽(たいやう)が険(けは)しい山(やま)を半分照(てら)して幽(かす)かに光(ひか)つてゐた。

重(おも)たさうにボツトリ雪(ゆき)を載(いただ)いてる木(き)の枝(えだ)が、日(ひ)の目(め)を見(み)ると俄(にはか)に力(ちから)強(づよ)くなつて、左(ひだり)も

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

5/2

勇士の力量を見よ！

と言ふやうな、嬉々

に二三度撓つた枝を掉るかと思ふ中に、ポタ

リ！　と雪の塊を振落した。トタタ、、、、、

と濕つぽい重さうな音を立てゝ雪の塊が落ち

ると同時に小い雑木が幾本も幾本も互に頭を上げたり掉頭を振つたりして、各々

の祖つて居た白い頭巾を脱いだ。そして真白

い生物の走るやうな形が甚の葉籠から出ようと

う見えたと思ふと、前の川岸に白い塊が幾つ

も駈けて来た。鶴が二三羽ピイく鳴いて川

東京二〇（鉄業坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

517

上の方へ飛んだ。

「好い景色だなア！」と男はしまいには敷居際へ坐って眩しい眼を数おまいて居ると、

「お早うございます。」と女中が縁に転く手を突いて嬉しそうに笑った。

「お客様、直ぐ御湯にお入りなさいますか。」

「否らう！」と夕オルを肩に掛けて、「何所だい？」

「御案内致します！！！」と先に立つ女中に連れて行くと、竹皮草鞋の杉下駄を縁先へ並

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

514

したので、

「内湯(うちゆ)や無いのかい」と問うた。

「すつと此の下になります……あの湯気(ゆけ)の立つてるのがお湯屋(ゆや)でございます。」

「切迷(さ)うか、随分遠いんだね。」

爺(じい)は下駄(げた)の痕(あと)をつけるのが惜しいやうな気(き)もする雪の中を歩(あるい)た。歩く度(たび)に下駄の下で雪がはづくり、づくりと鳴(な)つた。堅雪(かたゆき)には甚(はなは)だ難渋(なんじふ)する。

「物珍(ものめづ)らしい音であつた。鰯(いわし)の頭(あたま)も信心から、と云(い)ふ事(こと)を聞(き)いて居(を)ると、成程(なるほど)長い石段を降(を)りると川に沿(そ)つた旅宿(よくしつ)があつた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

男湯には一人も居なかつたが、板一枚を隔
てる女湯ではじやぶ〳〵湯を使ふ音がした。
二坪もある程の大きな湯槽には無色無臭の温
泉がぴた〳〵縁を洗つて槽外まで溢れて居た。
硬硝は辷り気味の湯槽の底を用心しイ
窓際まで行つて、ヴツぷり耳まで浸りながら
外を眺めた。陰鬱な高い〳〵見える山が、曇
白く雲の中に聳えて居た。亭々とした杉が頂
から青い雲の中に手を差伸して遥かに行く薄白
い雲を掴まうとしてゐた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

516

伸上つて窓枠の所から下を見ると、磧は一面に真白かつた。虎の臥て居るやうな、獅子の蹲つて居るやうな奇岩怪石の間を縫つて流れてゐる、真黒く墨のやうに見えた。しかし自分で自分の眼を疑ふやうに眩と共に、吸ひ込まれるやうに明に見えて来た。遂には川底の滑かな岩も小石の一つ〳〵も見えるやうになつて来た。岩に堰かれてゴボ〳〵と流れ落つる水の泡の一つ〳〵迄明瞭と見えた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

5-17

小い川鳥がピイーと鳴いて深緑の淵を潜つて再び石蒲の生えた岩の蔭に隠れた。

「お早うございます。」と不意に後から声がしたので堅雨は吃驚して振向いてみると、其処には品の好い娘が手拭を引つ提げて立つて居た。

「お早う！　山と堅雨は周章て、会釈した。

「善い湯かや。」と娘は近みざまブルくと震えを喞らしたから顔を洗つて居る有難いくと口を濯ぎつゝぷり顔まで浸つて独語ちつゝ悠然に、ずぶ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

518

てハアー、ハアーと長い息を引いた。隣の室は急に静かになつた。トン！と軽く閉の仕切板に触れた音がした。夫れが板に触れたのかと思つた。と、直ぐ堅牢の声は高かつた。夫れは隣りに居る女は夫れが時子では無いかと思つた。

田舎の村のお方は幸福ですナ、斯うお湯があるのおからー---

堅牢の声は高かつた。夫れは隣りに居る女が若し時子であつたなら、直ぐ敏感な猫女は夫れと感付くなろうと思つて・故ら高い声を出

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

519

した のであつた。

「喃！　薪一本焚かいで　も　妙が　御わ　くんちやさか。」と老人は　ろうじん　ちら　姉を　笑顔で　迎え　見たから、「あなたは　何地の　お方ですか？」と

「僕は　新宮です！」と　新宮　言つて　言つた。

「新宮？　へエー　新宮？」と老人は　堅爾の　顔を　又たがくと　視た。

「爺さんは　新宮を　御存知　ですか。」

「知りません　が……　あなたは　戎屋に　お泊り

（一四〇）（静岡県立中央図書館蔵）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

520

ですか……」

「いいえ、僕は梶屋(かじや)ん……」

「昨晩(さくばん)も泊まりばかり」

です。」

「はア、然(さ)うですか、戒厳令(かいげんれい)の敷(ひ)かれた軒(のき)のハイカ

ラさんが泊まりあるので……」

「堅雨(けんじ)はハハ！　と思った。しかし態(わざ)と沈着(おちつ)いた風(ふう)をして、「さうですか、何という名な前(まへ)ですが……」

「知りません、唯(ただ)もうハイカうさんで通(とほ)つてゐます」

「ので……」

「老人は濁声(だみごえ)で「ハヽヽ

(東京二〇(東京友下山田製))

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

521

と笑つた。隣の宿(よくしつ)では又(また)ガブ〳〵と湯を使ふ音(おと)がした。堅爾(せんじ)は急に恥(はづ)かしくなつて来た。時子(ときこ)は夫(それ)れは自分に空虚(くうきよ)を摑(つか)ませ玉いて捨子をするやうに、放(ほう)つて置(おき)ぼりに自分を捨(すて)た時子、甚(ひど)く怒(おこ)り怖(こわ)がる山奥まで慕(した)つて来(こ)たかと思ふと、紺(あお)の捕捉(ほそく)し難(がた)い時子は山奥(さんおく)自分を殺(すて)む違(ちが)い、寧(むし)ろ思ひ切(き)つて舎(あい)はう(おくま)なども思つて、無意(むい)に女つたり蹲つたり手拭(てぬぐい)を絞つて見たり、夫(それ)れを湯の中へペタリと投げて空気に膨(ふく)らんだの

半紙二〇（鈴梁友下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

S-22

を宮と掴んで丸い玉を造つて夫れを陽の体へ
引込みながら、ブンブンと鉢を出して見たり
して居た。
　忽と角する内に隣室の硝子戸がガチヤンと
鳴つて、若い女が急ぎ足に男湯の前を通つて
出て行つた。
　堅剛は思はずハツとした。女の後向いた白
い頸筋がチラリと眼に映ると、最う衝着いて
居られなかつた。
　「お先きへ、ム」と云ひ棄てゝソクサ出て

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

一行アキ

行って身体を拭きく 硝子戸に見上げると女は最う石段を半分も登ってゐた。堅爾は其の後姿を見ながら、時子かしら？ 時子であれかしと、あたふたといふやうな心に急かされながら、あたふたと宿に戻って来た時、もう手拭が板のやうに氷って居た。

堅爾は食膳に着いてから考つた。一体自分はどうして斯んな所まで出かけて来たのだらう？ 時子の手紙は成程感傷的であつた。人を

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別
6

524

挙げる力もあつた。が、時子が果し～夫程迄も強く自分に執着してゐるからうか。心ずお忘れあそばしたのからうか、其儘受容るべきものからうか。

時子の例の筆法で、何方にでも捌かれるやう、……と云ふ点に解すべきも

た。あの手紙の末尾は一体及腰に

分は全体時子れ夫程深く未練を残して居たの

に抜穴を造つて置いたのでは無からうか。自

ら進んで、釣落した魚は皆な大きイ！……そし

て夫が何となく惜しい……と云ふ様に時子

別
6

に逃げられた、そして居所を隠され、所が突然思寄った手紙が来た。其の鼓信の場所を探しあてんとの一心で唯仔細もなく時子が恋しくなって此所迄来ました訳なんです。仮令時子が最う出ようとも此所を動きはしないぞあるし、と言って罵る。唯自分で自分を馬鹿が！と言って罵る。唯自分で自分を馬鹿が！と言って罵る。唯自分で自分を馬鹿が！

別
6

526

さア舎み仲安がある のか無い のか解らなくなつて来た。

四一体俺は何なの為に斜の女を追かけて来たのだらう？四

堅previously は暫く無言で機械的に箸を動かしてゐたが、味も何も能く解らなかつた。

四お栄だよ。四と堅previously は家を突出して答を置き、四畢の八イカうさんも俺の名刺を持つて行つて呉れ！四戎屋に戻る 帰ります 帰ります 帰ります

別
6

一行アキ

つゝ不思議さうに堅面の顔を默つて見てゐた。

堅面は、驚いて名刺をおいして甚だ裏一御蘭西語で、

« le lion poursuit la lionne. »

と書流し、一ト口茶を飲んで帳を突き出しつゝそれを

獅子を追跡す。》と万年筆で

持つてツて呉れ！》

女中は、はゐ、宜しうございます、猫の松

本さんにですのし。》とゐつて

一緒に名刺をお梶の上に載せて持つて行つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6
2

5-7

時子が名刺を見た時、どんな顔をするだらうか、どんな返事をよこすだらうか、アメつタと笈んで来て、門先ア堅肅さん！と跳り付いて来ながら、時の上に打倒れて、しみ〴〵と泣くだらうか、或は長い手紙を持たしてよこしてゐすまないから、和尊だけは帝免下さい。と言ふ手紙がスらと開いて、最前の女中が敷居際に禍ひの宣告を下すると一

さいましたことをお見れかゝる事て来るので無からうか、などゝ考へてゐる所へ、次

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

527

三百廿四

に手をつかつた。ハツと思つて振向くと女中の後に婚礼笑みながら立つて居るのは昨日(きのふ)の晩子で あつた。

「先(ま)ア大伴(おほとも)さん！」と暗子は叮嚀に叩頭(おじぎ)をして、「いつ帰京(まかう)をお立(た)ちの？」

「一昨日……」と堅爾はドギマギし乍ら少し後(しり)へ膝行(にじ)つて坐り直(なほ)した。

「さう、では、私の手紙を御覧(ごらん)下さいまし た。」

「見たから来たのです」と云つたが急に誤(ご)

(半紙二〇行)(洋紙廿五行)(美濃廿行)(美濃半分)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

ト了。

慶(まか)すやうに、四少し静かな所で休養(きうよう)したいと思つて、……四

四だつて、私、住所を書いて無かつたでせうし。

四……少々困(こま)りましたが、清印で漸(ズメン)と見音(やうめい)をつけましてね。

四ですけど、お母(か)に懇りたいツて書かなかつた筈ですが……四

四夫(を)リやアまて悪れとは書いて無かつたけれど、あいふイキサツで訳(わか)りたぎりになつ

（原稿二〇〇字詰横書）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

5-31

ては寝覚が悪い。甚上にあんな病手紙を載いては夜擲らかしては置かれません。一度睦を実合こて、お互に言ひたい事を籠路りと打明けてから綺麗に別れたいと思つて、ー、ー、ー

別
6
2

しまった。

「そんなお話は最う、お止めよ。」と時子は急に調子を変へ、元気な晴々しい笑顔を作つて、

「久し振でお国にかへると直ぐこれですもの、私は吾儘ネ。ですけど大伴さんが……あら！　怒つてゐらつしやるの？　ごめんなさい。」と堅雨はむつすりとしてゐた。

「そんなら宜いけれど、折角久しぶりで国にかへつたのに、……」

(原稿二〇)(鈴柴坂下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6
2

S773

「俺は怒りやアしないさ。けれども貴女が餘り木で鼻を括つたやうな挨拶をなさるもんだから……」

「夫りやア私の氣質ですもの、木で鼻を括るやうな挨拶をしたからッて、私が貴方に對して悪意がある譯由ぢやア無し。ネ、宣いで せう、斯んな事……」と時子は涙ぐみ嬌を見せて、「夫れより か貴方、私な行末 變なものを勉強してますのよ。」

「大變なものとは？」

（東京 三田 坂下 製）No.110

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1
60
2

四ダアウ井ニやクロボトキヲを読んでます
のよ。
「成程大変なものだ。小説(せう)の方(はう)は此頃最(もつ)ろ
お止(やめ)めよ。」
「人情(にんじやう)っぽいものは最(もつ)ろ飽(あき)きくしました
。自分と云ふものを凝視(みつ)めてみると自分自身
が主張なき流になつてゐますリ。トルストイや
ツルゲーネフが面白くてね、自分といふ大き
な流を強んで見ると、最(もつ)ろ人の作つたもの
なんか讀む氣になれません。
。寧(じつ)を言ふと今

(半紙二〇〇字詰原稿用紙)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1
60
2

まで私は小説を読ませたり。イブセン
のブランドにある言葉を思(おも)い似(まね)る少(すこ)やアありま
せんが、私の今までの考へは皆な物の断片(フラグメント)に
過ぎなかったのです。エイナアとアゲネス
が人生を恋と花とで出来(でき)てゐる(は)やうに考へて踊(おど)
つたり跳(と)ねたりして、危(あぶ)ない緊崖(きんがい)から踏外(ふみはず)しそうな危険(きけん)も知(し)らない
愚(ぐ)な不面目(ふめんぼく)では駄目(だめ)です。海の神のバツ
カスやサイレナスを美しいと言つて喜(よろこ)んでる
日ヤやアありません。風俗改良、勧善懲悪(かんぜんちょうあく)、
早稲田二〇（鈴柴敦下山田鏡）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1
60
2

576

婦人問題、勤倹貯蓄、戦後経営、何と主義、夫れ丈け皆な立派な事には相違ありませんが、ちよつと見やう見真似で少しばかりホンの少うしばかり真面目になつて見たり、厳しく張つて見たつて、直ぐお面になつて乱廃に成つて了つまらない結末やありません。小い岩に圍まれたスカンチンやを世界の一等風だなんて威張つて居たつて、夫れも皆な欺作ですよ。善も悪もの、私は教育の鍵を何に投げ込んで理想の高

寄二〇（静嘉堂千山田鏡）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1
60
2

山へ登って行くやうな、そんな雰気は無いけれども、まつと一全體を見たいの。物の all 動かくこと規蒔迫しで科学的哲学的の頭を造らなければ……」と時子は兵剣な調子で迫る言つて居たが、急に平常の時子に返つて、「生意気ネ、私は……」と頭を少し傾げて嬉しそうに笑つた。

「偉いなア、山と半分嘲るやうな調子で「僕なんぞは最う勉強する雰気は無い。秘物屋の番頭さんで……」

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別1
60
2

538

「否（いや）、あなたは随（ずい）分（ぶん）ちやアんと専門家（せんもんか）でおらっしやるんなもの、私（わたし）なんか科学の予備（よび）智識（ちしき）が餘（あま）り無（な）さ過（す）ぎますから、何（なん）を論（ろん）んでも此（こ）の方（かた）が智（ち）くでも解（わか）らない事（こと）ですワ。これ丈（だけ）に居（を）らつしやるなら、千人力ですワ。これから毎日質問（しつもん）に上（あが）りますからネー……」

「夫（それ）りやア困（こま）る。」と堅（けん）次（じ）は未（いま）だ困（こま）つたやうな顔付（かおつき）をした。

「農学（のうがく）ツて本当に美（い）い学科をお選（えら）びになつたものネ。」と言（い）ひかけて後（あと）に気（き）づいたやうに

半紙二〇（神楽坂下山田製）

「否（いや）、あなたは随（ずい）分（ぶん）ちやアんと専門家（せんもんか）でおらっしやるんなもの、私（わたし）なんか科学の予備（よび）智識（ちしき）が餘（あま）り無（な）さ過（す）ぎますから、何（なん）を論（ろん）んでも此（こ）の方（かた）が智（ち）くでも解（わか）らない事（こと）ですワ。これ丈（だけ）に居（を）らつしやるなら、千人力ですワ。これから毎日質問（しつもん）に上（あが）りますからネー……」

「夫（それ）りやア困（こま）る。」と堅（けん）次（じ）は未（いま）だ困（こま）つたやうな顔付（かおつき）をした。

「農学（のうがく）ツて本当に美（い）い学科をお選（えら）びになつたものネ。」と言（い）ひかけて後（あと）に気（き）づいたやうに

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別1
60
2

5~78

に、「午前中は私の勉強時間よ。」「誰を怠け
ちゃア良くに寝ますいからこ
てよ。」と庸蔵を追つた様ならず失禮致しま
す。」
時子は左も用のありさうに、さつさと帰つ
てしまつた。「かしこまつた。」「又た出向いて参ります。」とも
かつた。あの熱情の濃かな手紙とを言ふは
た冷たい態度が理解には
かつた。時子が帰つたあとで「ちエツ
生

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別1
60
2

一行アキ

意気な女だ！」と思はず舌打をしたが、矢先
り時子の宿へ行つて見たいやうな気もした。
堅尋は何度も何度も北側の障子を開けて戻
屋の二階を見た。四イ目と目の
隔てた向ふにある二時子の居室は障子を閉め
切つたなり、其の中には人の居らしい気配
もない程であつた。で、堅尋はムシヤクシヤ
する跡を抱えながら気抜けした様に何度も何度もお
陽に傾いた。

半紙二〇（静栄社下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1
60
2

雪に包まれた山が薄黒い布で覆はれ初めた頃、昨日の室に入つて来た。

四ど つさり質問があるのに驚いた。一ト冊の洋書と辞書とを抱へ込んで来たのだ。

質問は進化論に始まつて生物学から遺伝学に及んだ。堅雨も餘程ヒドロモドロになりかけたが、好い加減な出鱈目で、生半可に瞞着されるやうな事を知つてゐるから、内心大いに辟易しながらも可成りに答へて置いた

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別1
60
2

「矢張り雪門家に数へて戴か神体駄目ね、お蔭で大變解つて来ました。」と言つて嬉しさに帰つて行く時子を見送つた時は、吻とするやうな氣持がした。

翌る日は正午過ぎに大伴さん故意しなくいてゐると言ふ声が戸の二階から聞えた。寝転んで宿の妻さんから借りた「良人自慢」を讀んで居た堅雄は、がバと撥ね起きて障子を引開けながらのはア、来ませう。」と言つた。

「然うよ、かやア私、お伺ひしますワ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1
60
2

549

時子は縁側をトン〳〵と走つて姿を隠したと思ふと直ぐ座の所へ現はれて、階段の上をコト〳〵と下駄を鳴らし乍ら二三間歩いて土間を見上げ乍ら、ゐ降りてらツしやいと招くやうにして言つた。

土間は始めて通るこんな山奥まで来ても、万事が都会を知つたやうに、昂奮を覚えながら段階を下りた。

二人は温泉場から川上の方へ一階二丁程も来たと思ふ頃、幅の狭い道路の真中を俺れ一人尻はしより踏み付け

寄別13-60 (鈴木坂下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1
60
2

九雪の中を用心しながら、ぽつり〳〵と歩いた。両側には杖のあとがあつた。人の小便をした所だけが細長くクツキりと解けて、青い苔が見えてゐる。面白くも思つた。

三町五町と歩いたが二人は別に話もしなかつた。サう〳〵ゴホ〳〵とは聞きながら、鉄座を通つて、小い氏神の社のある所まで出て来た。

甚時、時子は何を思つたか、堅雨を振向いて

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別1
60
2

一行アキ

「母様ですネ、本当に……」と言って女は笑つたが、不意を打たれた堅雨はのエールと言つたます言葉が出なかつた。

夫から三日目であつた。朝から一日も顔を見せない時子の事を想ひながら、軒先に手を翳して東ッ、東ッと息をする洋燈を見詰めて居ると、遠く縁側の障子の外から優しい足音が聞え、聴き覚えある衣摺の音までが判然と聞えて来たので時子さんだ！と竹の

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

に坐禅を直した。途端に障子はスラリと静に開いて、今吹はとも何とも言はないで夢のやうに、そうーっとスーっと入って来た時子は驚いて、ヤと立ち上がった。薄化粧した顔から眉の美しい程美しかった。薄化粧した顔から眉の美しい程美しかった。

美しい先を股ぎこそみた。満面から妖艶な甘い笑が流れ出るやうであった。堅剛は芸術で私らしくやうに、ずいと堅くなって見て居る前に坐って、たの少し睨らんだ

(縦二〇糎・横茨下山田製)

時子は辞気無く火鉢の縁を膝の上に載せた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

547

「今晩は迂闊にまたの〻と始めて口を開いて、「質問の連発で嫌なれちやア大變だと思つて〻。」

堅雨は何か含味悪くなつてマゴ〳〵して居た。

「怎うかなすつたのさ？」と陸子は頭を左へ傾げてこげ〳〵と堅雨を見た。

「いゝエ、どうもしないです。」と言つた時沈黙の堰が切れたのに氣付いて堅雨は初めて突拍子にハヽヽと笑つて、「何時するが、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

実は姿女のお顔を見ると冷汗をする。
悶が出るのかやア無いかと思つて……煙と者
ですよ……
四
今晩は随分なんか抜きにして、遊ませう。
ネ、堅ちやん。飯事でもして遊ませう。
そうれ覚えてらつしやるでせう、あの権現
の境内……小石を飯に、小ツちやいこれツぱかりのマン丸い穴があつたでせう。
あの穴へ蓬の葉を揃つてお餅を拵へ
のネ。四時子は右の手の中指と親指で猪口には

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

どの環を造つて見せた。

「僕はいつても甚の中へ砂を容れたりして嫁がらせをやつたものだネ。」

「然うよ、随分悪戯ッ児だつたのネ。」と揉出して、「私、カドベリーの十二ートッ……お嬢さんの？」

「嫌ひやア無いですが、同じ廿二ならチョコレートの方が宜いネ。」

「ちなみにアルコーリストなのネ、でも酒は

東二〇（酔楽坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

の堅ちやんは金米糖が好きだったワ竜。

ワさうゝ紺の頃には金米糖、夫れから三角四角に切目の入つた生姜板、夫れが一番子供ん衆が喜ぶお菓子だつたわネ。

ワ然うネ、ほヲ、覚えてらつしやるの？私が金米糖は胡麻の上にお砂糖を塗したのだつて言つた時、あなたはそんな事は無いつて……

とうゝ金米糖を石の上で絞つも絞つも砕い

たのでしたわネ。

ワうん。石の事で想ひ出した、僕が高等小

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

学を卒業しない時だつた。
いゝ石を拾つて夫へ僕は歌を書いた事がある。
和歌をサ……僕も和歌を作つた事があるん
だよ、斯う見えても……あれは何とか言つた
つけ……さうそう平ダカこへイツテキマセラ　ニチエフノ　ヒルカラワタシハワタシバデマツ……ウて云ふのでした。
堅勇は、はゝゝゝと朱唇で笑つた。
井田の観音様を平ダカこと思つて言ましたリ。だつてゑゝ。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

552

えんな歌を覚えてみませんヮ。

　　四

覚えて居なさらないと笑ですよ。僕は其の石へ畢生の智慧を絞つて作つた私歌を書いて、あの楠の樹の下の石垣の上に置いて帰つた翌日学校の門の所で、のでした。そして其の翌日学校の門の所で、妙そこした所に紙片を置いてあるのを、あなたに呉げるからつて言つたのでした。其時あなたは、「分ろう有難う」つて言つてなすつたから、夫れを拾つて読んで下すつた事だとばツかり思つて、僕は渡頭の所で臨今と長

池の回覧ん

東京三〇（酔柴坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

5551

く待つたのでした。所があなたは着を見せなのつれなです。で、僕は樟の木の下へ行つて見ると甚所に牛ヤーとと和長い石がある外や アありませんか。甚僕は憮然として甚の石を川原の砂の上へ叩き付けたのです。先ア夫れは……

堅雨の声は悲しさうに顫つてゐた。時子は冷然として、

ねそんな事、初耳よ。ピヨールソのアんネのやうネ。私がエリーのやうな可愛い娘だ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

フたら、ーーえして二人が黒い湖を小舟に乗つて渡つたのがつたら、ーーー木、いい、もう甚様なお話はしッこなし。止しませう、もつと無駄な気なお話をしませう。サ、堅ちやんお手を出し、お生姜板を上げますッ。

堅助は正直に右の手を差出した。時子は笑ひ乍ら一つ宛に裁せた。

外では冷い風がゴウーッと山の木の葉を揺り乍ら峯から峯へ吹き渡つて行つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

555

宿命 十三

約束

二十五枚

通計 五百十五枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

556

約束

「二三日見えなかつたネ、」と薬局の窓から顔を出した田原は例の茶落な調子で「サァ、上り給へ、今日は少し相談せにやならない事もあるんだよ」

「私も即相談があつて……」と音奥は書齋へ通つて座に就くが就かないうちに、田原は

「ニコ〳〵笑つて入つて来て、松本艦もいよ〳〵戰闘力が盡きて大伴艦

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

557

渠へ入つたネ。

㊀ 御存知ですか、実は甚の御相談に上つたそですが、教舎から何か祝つてあげなければなるまいと思つて。

㊁ 祝ひの事は後で宜いならう、どうせ一度は此方へ帰つて来るだらうから。

㊀ さうですネ、いつ頃帰られるでせう？

㊁ さア、甚所の所は判然解らないが、何しろ少し風変りの結婚式だから、よしんば帰つても風変りの、二月十五日に元旦教舎で日高

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

ほくし
牧師の司式でやるんでせう？
「然うだ、しかし夫れには時子さんからの註文があるんだよ。」
「どんな註文です？」と音無はおとなしく好奇の眼を耀かやかした。
「訊いたら承知しないぞ。」
「堅雨君が態々高奥の龍神温泉まで時子さんを追つかけて行つた結果、此の結婚を破棄するといふのです。」
「約束だけなら承諾するが、時子さんは約束だけでは承諾しないのだ。」
「では撃剣の仲妥は無いかや

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

ありませんか。」

「甚だ変つた註文なのですが、堅爾君の熱烈な愛情に絆されて約婚だけは為たが、直ぐ其日から時子さんなどは眼にも入らず、図書館通いをするのだもの、随分上京して、図書館通いをするのだもの、随分面白いならう？」

「さうですか、どうしやうかしら。堅爾君よりも、もつと愛せねばならない人が出来ると、時子さんは何う為ませう？」

「僕の所へ来た手紙で見ると、時子さんは現由でせう？」

「あるつてえ訳なんだネ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

5-60

「もつと愛せねばならないの？、あの堅爾君より も、……」

「さう望かないでも宜いといふのは、時子さん自身の事さ。時子さんは今、自分で自分を恋してるんだつて、で、自分といふものより も、もつと堅爾君を可愛く思ふ時が来たなら同棲しようつて註文サ、つまり夢性を仮りたくないと言ふんだネ。」

「さうですか、夫れで大伴君も承諾したの？」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

561

です。

「承諾もへチマもないさ、君、帯ゆう子

ものは結婚式前には、へイコラと頭を下げて

いどうでどうって女の前に奴隷のやうな様を

もして見せるのサ。けれども女を手に入れ

次上俯かれ暴君になって虐政を行ふんだから。

其時になって女は皆な泣くのサ、アこナカレ

ニナかって然うがやないか、ウロこスキイの

あの口説く時の態度と、結婚後の態度との変

りやうの甚い事と見給へ。時子さんは能う

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

562

甚の男心を呑込んでるんだろ
う。だから俺の女
……仲々食へない女だから、
心誠えて旦高島まで尋ねて行つた
す
に直ぐオイソレと感心してる
よ。堅爾君の方では、なアに
偉さうな事を言つて居ても、
此方のものだと思つてるんだ
んばかりは、千ヨづつ
田舎は痛快なとこみやうは行かないよ。
た。音無は眼をパチクリしながら、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

5613

「心よ
「御隠居が能く夫を御承諾なさいました
ね。そんな流変りの結婚をいたく
「風流する所や奥ゆかしい、大賛成だ。あの隠
居も随分苦労をした人だからネ、堅爾君の性
質も能く知つてゐるし、時子さんの気合も
呑込めたんだネ。」と云つて旧臭は一寸言葉を
切つたが、「時に、君は知つてるかネ石塚君
の結婚を？」
「石塚君が結婚？　誰と？」
「須基子さんとだよ、僕が橋渡しとい
ふわ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

564

けちや ア無いが、先ア媒人格となつてる。此間皆と一緒に成立へ鰻屋へ食べに行ったらう。あの時ア、あの帰途に隠居と石塚君と僕と三人が宿屋へ寄って約束を定めたんだよ。」

「然うですか、夫れはお目出度い、良縁で

すネ、何時式を挙げます？」

「式までは マダ間がある。四月に 君子の披露をする豫定になってる。」

「石塚君には老人の妹二人ともマダ若いんだから急ぐ事は無い。」

「成る丈早く片付けて貰って、復基子さん

話序に財産管理の経験を積んで

東京二〇（鈴柴茨下山田藏）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

んはナオミさんを付けて二三年京へ出して勉強させ、おあつ十九か二十になつたら結婚式を挙かさせようかと思つてる。だから東京で時子さんと三人が一緒に暮すならう、夫れは大變宜い事だと思ふ。」

「然うですネ。」と音要は氣の乘い返事をした。

「然うなら、君、時子さんは堅爾君と石塚君とを一度に呑して居たんだから、夫れが堅爾君と結婚して石塚君からとを取つたら今度は叔母さん叔

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

566

母さん言はれるんだからナ。
んがらがつた事は、堅爾君が最初ナオミさん
と結婚したかつたのだからナ。夫れを今一つこ
つれ縺れ合つたんだから——すもつ
か、組所へ君が一つ切り込むと面白いかやない
くなるんだがナ。」と言つて笑つた。
にハヽヽと笑つた。
「そんな雰氣もありません……心と言つた
が音聖の耳朶は紅くなつてゐた。
「なから太地家大伴家両家の将来の為に、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

567

二三年三人を一緒に寄させて
るのも宜い事だよ。
の何しろお母さん、双方が無事に納つて
結構な事です。
白しめし君、これは内輪の相談で、マア誰
にも発表しないんだから！！！！全体約束なん
て詰らないもんだねえ。
田原は何を思つたか、紙かに調を変つて
さう言つたが音吾は黙つて眉の上に眼を落し
てゐた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

僕は此間から時子さんの事とかで、大分時々と空電して、コソコソと内証で相談したり、何か彼の此のと何年も前の事を今から決めて見たりしたが、考へて見ると馬鹿な話だ、教は兵理だよ。僕も月並に太地の隠居に頼まれて忽ち媒介顔をして石塚君と復た時子さんの話は経りをか、佐夫がどうなるやら解つたものぢやア無い。結局は太地家に何十萬とかの金があるので、其の財産の居に

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

568

時子さんも須芝子さんも百合
子さんのサ。愛なの戀なのと騒
ぎ廻つて、今日の社會組織では生活問題が大体の基調になつて
ゐるやうな(傾向)社會組織
が、なきア皆な誤魔化しなよ。此間僕は淑吉
に面白い事を見た。夫れは川向ふの小学校長
を勤めてる男が鼓狂して此家へ来た時の話だ
が、其の校長は最初僕の所へ来て頼りに教育
に僕の机の上に置いてあつた雑誌のコムレ
ー
軒誌なとか道徳なとか言つて居たが、帰る時

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

569

下を黙って持くんなら。夫れは僕も
な読んで居ないから、錠を持って行
くなって言はうと思ったが、まア〳〵狂人の
事だから放って置けと思って置いた
ら、直ぐ二三時間経って
ノコ〳〵やって来て、面白いで！
を僕に見せるのサ、夫れは〳〵無邪気な甚の
挿画の説明を僕にして呉れて
は可愛かったネ。で、
叮嚀に一々説明してや

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

夫れか本書の所有権ならうと思ふ。

570

ると、大変喜んで、「ではお礼に此の雑誌を君に進呈する。」と言ふんだから、不思議な事もんだネ、其時僕が一寸躊躇しやうかと、頂戴しとく」と言つた言葉は心からの謝意が少しも無く僕のものでも無く其同の所有物で、夫れを持つて居るものが其時だけ本当に愉快に満足して夫れを所有してゐひつえる不甲斐なるとを深く夫れを他人に譲るんでは夫が餓も。吾々は空気と水に対しては夫を水が

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

577

自分の所有かと自覚しない程自分のものになってみるんだから、愛着を感じて其執着を有つ時代が来るならば、それは実に結構な事であり、利己的な思ふ心。

だから今日の約束とか誓約とかいうものは畢竟私有財産保護のためで、貪慾な心を美しく粧飾した好い加減な名ではないか。

四つでは自他の区別が無くなって夫婦なんてものも皆な共同になるんですかね。

世の中が夫れ程進化した

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

大時には甚の時代の人間の
比例し進寄するから来、
請求主義を執つてゐる。けれども本當に從の
薬のお蔭で病氣が癒つたと思ふ者は請求しな
いでも薬価を持つて来る、又
大根なとをお礼に置いて行くよ。仮令病氣は癒
つても薬価をよう拂はない連中は、途中で從
の顔を見ると直ぐ横町の方へ隠れてしまうた
り、無暗に叮嚀なお辞儀をしたりする。甚の
心の苦みを見る時、從は薬価を貰ふ以上に氣

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

573

の妻に思ふよ。又た中には、自分のやうな貧乏人――朝から晩まで働いて四十銭五十銭しか儲けられない貧乏人が、妻子を抱えて苦しい生活をして居る上に病人取付のやうなんかあると、医者は無料で薬を飲ますると義務があるとまで思つてる連中もあるだらう、夫を水地走問ではない、僕は、サくとも僕一個人とつては夫丈の事の徴弁だと思ふ。

僕の生活には其様な人達に薬を無料で与るなんかあるんだから、僕は自分の良心に

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

S74

従つて其様な人達丈はこちらから進んで薬を飲
んで貰ひやうにしたいと思ふ子。僕が毎日診察
に行く度々な人達か、その寒い時に咳嗽も
火鉢も無い汚ない小屋の中でゴホ〳〵と
云つて僕を迎へる其の眼の色には、未だ
全快で換へる事の出来ないものがあるか
ら不。僕はそんな時真の人間としてよ
るこだ。或段所の十便をしてゐる男の家に病
人があつて其所へ僕は半年も往診してやつた
が、固より薬僧なれば充分に効く筈は無

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

かつたが、甚の男は若い時名古屋に奉公した事があつてとかで、一昔残りの道しらべの振一市を知つてみたと見え、役所から帰つた股々に一昔張の机を一つ拵へて、夫を禮に持つて来て呉れたが、借は本当に気の毒に思つた不。財産家が自分の親の死ぬ前に大学から博士を備つて来て何千円も金を使ふ事の孝行よりも、此の一昔張を借に思ふる心の方が善いと思ふ不。借らの悩つる思想が危険な人て言ふ運中は此ん等の良心の働きを無視

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

5-76

した議論で、夫れの市が僕は
狗子にも仏性ありサ。」と
たのを悟つたらしく、「やや、
つたネ、僕はこれから注診
から……」と
「やまこえお郵便致しま
起上り乍ら、「ではお祝い
きませうか。」
「さうだネ、二月十五日午後六時から、
甚四の朝、日高教師宅で祝宴
おつて通け

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

517

い

宜いかやないか。」

「わあ、さうしませう、さうた。」

「さうた。」

「即席が出ますナ。」

「先ア、何誰かと思つた。」

「絶世の美女とナオミは喫驚して顧眄りざま、」

「絶世の美女とナオミとが小さなこやぶルで土を掘つて

子とナオミとが小さなこやぶルで土を掘つて

道ん太地の門前を通ると玄関前の空地で須美

つて行つた。音曲は田舎の体を出て甚の帰り

ゆさうた。」と云つて田舎は華奢の方へ入

「わあ、さうしませう、」

「宜いかやないか。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
2

S78

は仰山らしく驚いた真似をした。

「須芝子さん、和女さんが出来てお日出度う。」

「あら、先生知ってらしってゐしと須芝子は顔を真朱にしてお日出度うなんて嫌だワ。」

「お日出度いちやないですか、須芝子さんはあの和女さんがお嫁ひするんですもの。」

「嫌ですやないけれども……」と少し言淀みつゝ、「ナオミさんに先生が和女さんに

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

なつたら猫ほど宮かつわいゝ。

ナオミは聞えぬ振をして終を向いてみた。

音無は笑ひながら、ナオミと睦んで立つてゐる従弟の丈が俄かに伸びて高くなつたのをおろ〳〵と瞻めてゐた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別13
60
2

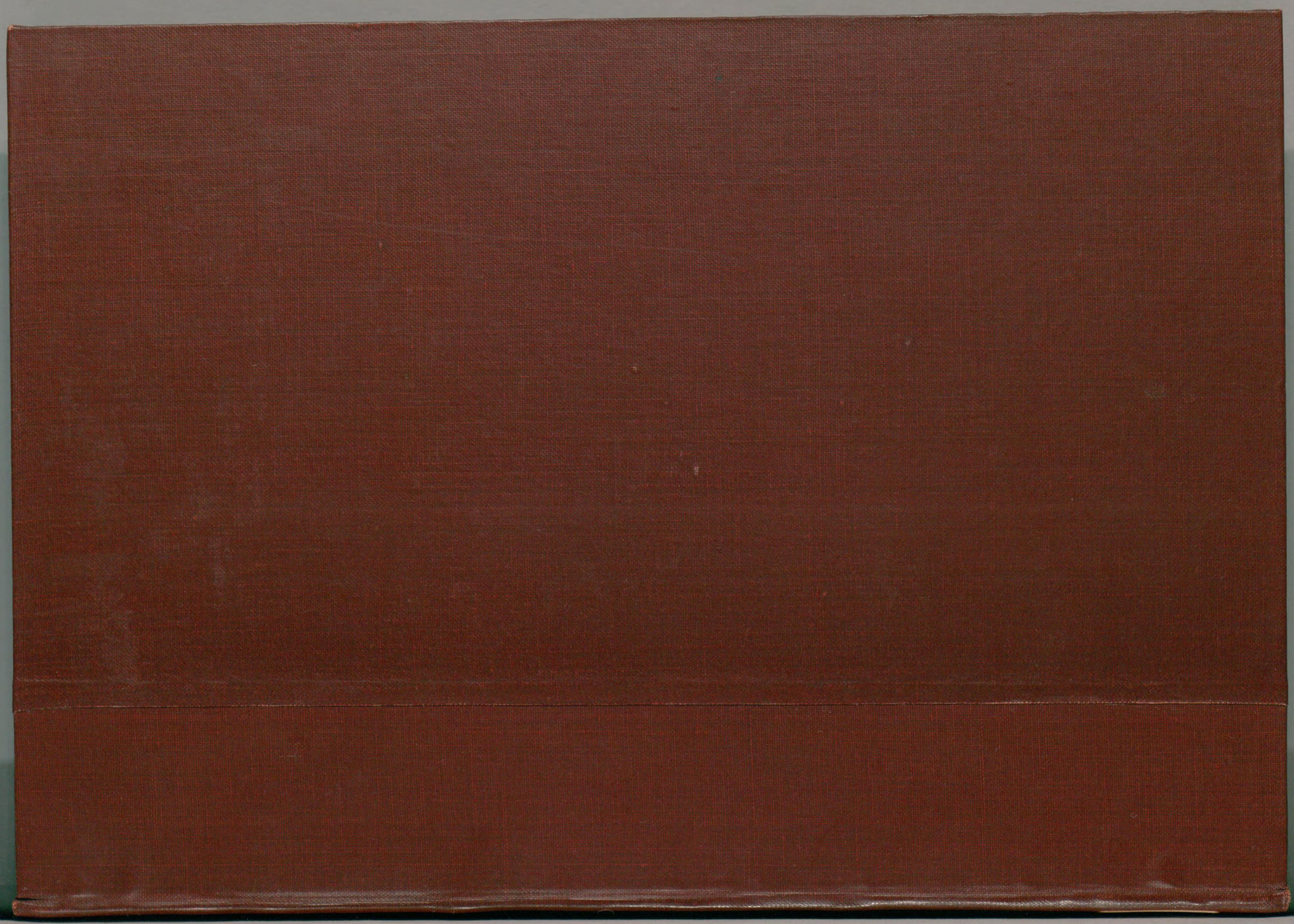
国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
2

国立国会図書館　　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用



ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60